

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「住み慣れた地域の中で自分らしさを誇りを保ち安心とやすらぎのある暮らしをサポートします」のケア理念を施設内に掲示し理念に沿ってケアを実践している。	ケア理念については1階ホールの壁、2階共用部分の壁にと目に付き易い所に掲示し共有と実践に繋げている。殆どの職員は介護福祉士の有資格者でもあり理念の持つ意味を正しく理解して支援に取り組んで居り利用者は安心して日々の生活を送っている。家族に対しては利用契約時に理念に沿った支援の取り組みに付いて説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域のイベントに参加しているが、コロナの関係で交流できていない。しかし地域の民生委員さんが野菜や果物を届けてくださったり、散歩では挨拶を交わしたり関わりを大切にしている。	開設以来区費を納め地域に密着し開かれた施設として相互交流に力を入れ取り組んできたが一昨年の春以降新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けすべての活動が中止となり残念な状況が続いている。そのような中、地元の小4年生が授業の一環として年3~4回、2日間ほど来訪し利用者との交流を通じ「高齢者とのふれあい」について学んでいる。新型コロナ収束後には各種ボランティアの受け入れや小学生、中学生等との交流活動を積極的に展開する予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎年4回程4学年児童と交流を行っている。昨年はコロナの関係で2回交流され認知症の方の理解を深めている。また、地区社会福祉協議会の方々と情報交換を行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナの関係で令和2年2月まで開催していた行政の指示にて年6回文書にて区長、民生委員、市の高齢者支援課へ報告している。災害時の相談について行政や地域の方に相談・対策を立てている。	新型コロナの影響を受け現在は書面での開催となっている。利用状況、活動内容、職員研修、待機者状況等を書面にし、2ヶ月に1回発行している「こだま便り」と共に市高齢支援課には郵送し、区長、民生委員には直接届け、意見・助言等を頂き、サービスの向上に活かしている。新型コロナ収束後には以前のようなホームの行事に合わせた運営推進会議が行えるようにしたいと心待ちにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者や地域包括支援センターとの連絡を取り合い相談報告をしている。介護認定調査の際も同席し本人の様子を伝えている。	市高齢支援課とは様々な事柄について相談している。管理者が中野市のグループホーム部会の役員をしていることから年間の研修テーマを考え部会を盛り上げている。合わせて市主催の研修会にはオンラインで積極的に参加している。介護認定更新調査は調査員が来訪し職員が対応している。市の介護相談員の来訪も新型コロナの影響を受け中断されているが、利用者も再会を楽しみにしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、内部研修で学んでいる「身体拘束に関する指針」に沿って身体拘束委員会を行い、拘束しない方向で検討している。身体拘束があった場合、経過観察、心身状況と身体拘束経過記録を行っている。	基本的に拘束のない支援に取り組んでいる。転倒、転落リスクが大きくなり家族より依頼がある場合には話し合いを重ね、危険回避のためベットの柵を使用する場合もあるが、経過観察を行い必要の可否を検討しながら取り組んでいる。外出傾向の強い利用者もなく玄関は日中開錠されている。また、転倒危惧のある方がおり家族と相談の上センサーマットを使用している。スタッフ会議の中で身体拘束適正化委員会を開き、拘束に対する意識を高め拘束ゼロに向けた支援に繋げている。	

グループホームこだま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修を行い、職員は理解を深め、あざや傷があった場合には原因について予防策を話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	オンライン研修を活用し理解を深めている。利用者様のキーパーソンと話し合い早めの対応に心掛けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結では、きちんと説明を行っている。また、解約時も理由について説明し、納得されている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	新型コロナウイルスの影響で意見について外部者へ表せる機会は少ないが、運営推進会議の資料を区長、民生委員、市行政へ報告し伝えている。	新型コロナの影響を受け居室での面会は難しい状況が続いているが、事前予約を頂き、検温、手指消毒等を行った上、玄関先での30分以内の面会を行っている。家族会やクリスマス会への家族の出席が難しい状況が続いているがホームでの生活の様子は年4回発行されるお便り「こだま便り」に担当職員のコメントを添えお届けし電話等でもきめ細かな連携を取っている。また、誕生日会には家族より「果物」「お菓子」等の差し入れを頂き、好きな料理を食べながらエレクトーンの演奏に合わせてパースデイソングを歌いお祝いし、楽しいひと時を過ごしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	概ね月に1回スタッフ会議を行っている。運営に関する提案についての内容や方針を報告している。	月1回スタッフ会議を行い活動予定を確認したり、インターネット動画を利用して「利用者の立位の取り方」等の介護技術を習得したり、意見交換等を行い、業務の円滑な運営に繋げている。毎年1月には1年間の反省、次年度の目標設定、自己管理等の発表を行い、管理者よりコメントを行いスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	介護職員処遇改善加算・特定処遇改善加算を取得し、資格手当や子育て手当等も充実している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修では、テーマごとに資格を有する職員が講師として資料作りや技術を学ぶ機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設部会に積極的に参加している。災害時の助け合いについて意見交換ができています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族や関係機関からの情報は職員間で共有し、少しでも落ち着いた生活ができるようにしている。時には、家族の協力を頂き対応することもある。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所された際は、利用者様と家族の関係が悪化することのないよう配慮している。また、要望等を伺いながら対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	支援の内容について説明し、本人と家族の意向を把握し理解を深めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	レクリエーション、洗濯物たたみ、食器拭き、部屋の掃除などできることは職員と一緒にやっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルス感染予防に努めながら、面会は大切な時間と判断し状況を見ながら行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人のかかりつけの病院の継続支援を行っている。自宅周辺のドライブも心掛けている。	家族より事前に連絡をいただいている親戚の来訪があり、玄関先で面会をしていただき、頂き物等は家族に報告している。また、ホームの電話を利用して家族と連絡を取り合いストレス解消に繋げている。年末の年賀状作成は職員が手助けし家族に発送して喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	自席は気の合った者同士になるよう配慮している。また、ソファでくつろぎながら会話できるスペースもある。食事や軽体操も一緒に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	立ち悔やみへの参加や退所後のご家族様の意見や相談も伺い、精神面のフォローもを行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活の中で好きなことを把握し、ご本人が明るく楽しく生活できるよう支援している。また、家族からの情報も得るようにしている。	全利用者言葉で意思表示の出来る状況で、様々な話をしてくれるのでその中から意向を受け止め希望に沿えるようにしている。レクリエーションをしている時や入浴時等、日々。気づいた言動等は個人記録に纏め、出勤時に確認し支援に繋げている。また、今年8月に2名の方の看取りを行い最期の時を迎えたのが昼間ということもあり、他の利用者もお見送りをした。その際、自分の最期の時の希望を話された利用者もいるという。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービス利用関係者からの情報提供やご家族様、ご本人様との会話の中で把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の暮らしを観察、記録を残しスタッフ間で共有している。また、観察が必要な事項については、職員に周知し把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に1回スタッフ会議を行い、利用者様の対応について話し合っている。状況の変化があればその都度、介護計画を見直し家族に確認している。	職員は2名の利用者を担当し、居室管理、家族との連絡等を行っている。また、薬の担当者が薬の管理を行い、家族と連絡を取り合い補充に繋げている。「運動能力」「歌を歌う力」等、ケアプランに沿ったモニタリングを管理者が行い、スタッフ会議の中で職員の意見を出し合い、家族の希望も加味した上でプラン作成を行っている。入居時は3ヶ月でプラン作成を行い、様子を見てその後6ヶ月に1回の見直しを行い、状態に変化が見られた時には随時見直しを行い、一人ひとりに合った支援に当たっている。また、看取り支援に入った利用者については1ヶ月毎の見直しを行い、きめ細かな支援に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録を通して日々の様子やケアの観察情報の共有を行っている。また、日中の記録と夜間の記録は色分けを行って見やすくしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	同業者とのネットワーク作りを行い、災害時や緊急時の助け合いを検討している。利用者様の受入や職員の派遣も検討している。		

グループホームこだま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ感染にて地域の方々との関係を築けていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ターミナルに向けて細かな連携を主治医とする。また、日常の体調変化では家族や主治医と相談し適切な医療を受けられるように支援している。歯科受診の支援も行っており、しっかり食事が摂れるような支援もしている。	全利用者が入居前から継続しているかかりつけ医の受診で対応している。体調が安定している方の定期受診は家族対応で行い、体調に変化が見られる方については管理者が付き添い、主治医に細かな相談をしている。また、契約の訪問看護師の来訪が週1回あり、利用者の健康管理に当たっている。歯科については必要に応じ協力歯科での受診で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	1回/週、訪問看護師との相談援助を行っている。日頃の変化等訪問看護師に伝え、常に体調が良い状態で生活できるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者様と家族の関係を保っていただくため、受診や内服薬を家族にお願いをしている。日頃の体調については文書で主治医に伝え内服薬の見直しもしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末については入所者の家族がターミナルまで見て欲しいと希望されている。8月も99歳の女性2名が旅立たれた。共に生活した利用者様と共に賛美歌でお見送りをした。	終末期に対する指針があり利用契約時に説明している。終末期に到った時には改めて家族の意向を確認の上、看取り支援に対する同意を頂き主治医との連携を取り、医療行為を必要としない場合に看取り支援を行っている。この一年以内に3名の方の看取りを行い、新型コロナウイルス禍ではあるが感染対策を取った上で家族も居室で最期の時を共にし感謝の言葉を頂いている。また、他の利用者も共に最期のお見送りをし、自分にあてはめ希望を話される方が多くいたという。看取り後はスタッフ会議の中で振り返りの時間を設け、次回に繋げるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	異常が見つかった場合は、速やかに受診を受けている。夜間に発症し朝に気づいたこともあった。(脳梗塞)		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	BCP災害対策について映像にて職員で学んだ。	BCP(事業継続計画)に対する担当者を決め、緊急事態に遭遇した際の事業所としての取り組み方を明確にしている。年2回防災訓練を行い、6月には消火器の設置状況の確認、消防署への通報訓練、利用者全員がペラダまで移動しての避難訓練を実施している。10月には消防署員参加の下、消火器の使い方講習、スマートフォンを用いた緊急連絡網の確認訓練を行っている。また、引き続き市の福祉避難所の指定を受けており、非常時には2名の受け入れが可能となっている。備蓄として「水」「お米」「レトルト食品」「消耗品」等が準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄時の声掛けや援助では優しく対応している。また、すべて個室対応であり訪室時は必ず声がけを行っている。	言葉遣いには特に気を配り、方言を交えながら優しく、温かみのある声掛けをしている。また、排泄を失敗しても優しく声を掛け、入浴の際には他の方に見えないよう配慮している。夜勤職員は全員男性なので入室の際には特に気を配り、外から声掛けをするよう心掛けている。呼び掛けについては基本的に苗字を「さん付け」でお呼びしている。年1回、接遇の研修会を行いプライバシー保護に対する意識を高め支援に当たっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話を心がけ思いを伝える関係が築けている。お誕生会のメニューを伺い献立を変更している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	午前中自室で休みたい利用者様には希望に沿って対応している。不穏状態の利用者様には一緒に散歩に出かけ寄り添った対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪はホームで行い、「私もお願いしたい!」と、おしゃれを楽しまれ、いつもきれいになっている。また、希望者には毛染めもやっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	キッチンで毎食手作り料理を提供している。食事の時間が近づくとテーブルを拭いて下さる方もいる。配膳時は「美味しそう!」と楽しまれる。「食器拭きましようか?」と手伝ってくださる。	家庭的な雰囲気を大切に手作り料理を主に取り組んでいる。若干名の方が全介助という状況で、他の方は自力で食事が出来る状況である。献立は1年分の基本献立を参考に、ホームの畑で収穫した新鮮な野菜をふんだんに使った野菜中心の献立で、肉と魚が昼、夜ダブルにならないよう意識して調理している。利用者のお手伝いについては力量に合わせ、テーブル拭き、食器拭き等に積極的に参加される方が多く、調理の「匂い」も食事の楽しみの一つとなっている。また、クリスマスには地元の名店の「カツ重」をテイクアウトし、お盆には「おやき」を作り、誕生日には「おはぎ」で楽しいひと時を過ごしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分摂取量はしっかりと行っている。常食、ミキサー食対応も行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアでは、一人ひとり見守り援助を行っている。口腔状態を見ながら歯科受診支援も行っている。		

グループホームこだま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄記録を行い排泄チェック表から個々の排泄パターンを把握している。時間誘導や声がけを行っている。また、下剤の調整も行っている。	大半の方は一部介助でリハビリパンツとパットを使用しており、全介助でおむつ使用の方が若干名という状況である。そうした中、トイレでの排泄を心掛けている。起床時、食事前、就寝前の定時誘導と合わせ、排泄表を用い一人ひとりのペースに合わせて声掛けを行い排泄に繋げている。入居前便秘がちだった利用者が多いが、規則正しい生活を送り、野菜中心の食事を摂り、また、乳製品中心に1日1,000cc以上の水分を摂取することによりほとんどの方が便秘を解消したという。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	850~1000ml/日の水分摂取に努めている。野菜の多いメニューを提供している。また、毎日踏み台昇降運動や軽体操を行い、便秘改善に努めている。入居後は下剤の内服量が減っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	月、木曜日の午前中に入浴を行っている。夏の間は土曜日も追加し清潔な状態が保たれている。曜日や時間は決まっているが利用者様の生活リズムが整っており予定をされている。	全利用者が介助を必要とする状況で、リフト浴使用の方が三分の一ほどいる。基本的に週2回入浴を行い、夏場は週3回の入浴を行っている。現在、入浴拒否の方ではなく全利用者が楽しく入浴している。入浴剤を使用したり、「バラ湯」「菖蒲湯」「ゆず湯」等の季節のお風呂も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温管理や部屋の明るさ、寝具の洗濯をこまめに行い、快適な環境に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は誤薬や飲み残し等がないよう服薬確認や管理をしている。また、利用者一人ひとりの服用している薬の目的、用法用量、副作用を個人用ファイルに保管し全職員が把握できるよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	居室の掃除、洗濯物たたみ、畑で採れた野菜の下ごしらえ、縫い物の支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナ感染症対策で密にならないような外出行事を企画し、季節を感じてもらえるようドライブやお花見に出かけたりしている。	外出時、手引き歩行の方が三分の一、歩行器使用の方が若干名、車いす使用の方が数名という状況である。新型コロナの影響を受け外出の自粛状態が続いているが、天気の良い日にはホームの周りを散歩したり畑の野菜の収穫を楽しんでいる。また、ドライブを兼ね春には花見に出かけたり、秋には志賀高原まで紅葉見物に出かけたりしている。	

グループホームこだま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	通院時はタクシーを利用して支払いをしている。また、お金を所持している利用者様もいる。定期的に残金を家族、職員が把握し紛失しないよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状にコメントを記入されたり、家族と電話で話したり手紙も定期的に届いている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関やフロアにはお花を飾ったりしている。室内は換気を定期的に行い、高機能の空気清浄機を使用している。	広々とした敷地内には家庭菜園用の畑があり数々の野菜が栽培されている。玄関前には外気浴用のベンチが置かれ、寛ぎのスペースとなっている。1階のホールはキッチンから全体が見渡せ一体感が感じられる。また、掃除が行き届き清潔感が感じられる2階ホールには応接セットが置かれ、家庭的な雰囲気を出している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	個々の落ち着ける場所を尊重しながら利用者間のつながりができるよう配慮している。1,2階にはソファがあり、くつろぎ空間となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	安全に動けるような環境に配慮しながら使い慣れた寝具、写真、お位牌が置かれ安心した居室となっている。	整理整頓が行き届き広々とした居室には大きな物入れが設置され暮らし易い造りとなっている。家族と相談の上、イス、テーブル、衣装ケース、テレビ等を持ち込んでいる方がおり、家族の写真やお位牌等にも囲まれ、思い思いの日々を送っていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自室からトイレまで手すりを活用し転倒リスクを低くしている。バリアフリーとなっており歩行器移動も負担が少ない。		